

氏名	張 桐
学位の種類	博士（ 農学 ）
学位記番号	甲 第 61 号
学位授与の日付	平成 28 年 3 月 20 日
学位授与の要件	信州大学学位規程第 5 条第 1 項該当
学位論文題目	森林公園における利用者の行動と空間の印象評価に関する研究
論文審査委員	主査 教授 佐々木 邦博 教授 植木 達人 教授 大窪 久美子 教授 武田 孝志 教授 上原 巖（東京農業大学）

論 文 内 容 の 要 旨

良好な体験ができる森林散策ための空間を利用者に提供することは重要な課題である。そのため、本研究は森林を散策する利用者の行動とその時に受けた印象評価の 2 つの面から利用者の評価を明らかにすることを目的としている。得られた結果を、森林散策空間の計画及び改修に関して役立たせたいと考えている。

この目的のため、本研究は以下のように段階を追って進めていく。

(1) 森林を散策する利用者の主な移動経路を明らかにするため、主な利用実態と属性をアンケート調査で把握する。

(2) 利用者に対し同行調査を行い、散策コース毎に会話や写真撮影などの評価行動と、評価した対象物、及びその場所の関係を分析し、考察する。

(3) 利用者が散策するにつれ、評価行動はどう変化するかという点、また散策コース上において共通する評価行動が生じた場所を明らかにする。

(4) 散策ルートが異なる利用者が散策ルート上にある特定の空間を訪ねた時に抱く印象評価、そしてその共通点及び差異点を明らかにすること。

第 1 章では、既往研究の着目点と成果を説明し、本研究の意義、位置付け、及び論文の構成を示した。

第 2 章では、本論文の調査対象地、調査方法を説明した。

第 3 章では、代表的な森林公園である赤沢自然休養林における利用者の主な移動経路とその特徴を調査し、明らかにした。

その結果、赤沢自然休養林において利用者の移動経路は主に 3 パターンに分類できた。主に溪流に沿って、1 つのコースのみ利用するⅠ型、2 つのコースを歩き、公園内を小さく回るⅡ型、3 つのコース以上を利用し、公園内を広く歩くⅢ型である。その中でⅠ型とⅢ型の利用が多かったことが明らかになった。

第 4 章では、散策コースにおいて利用者が評価した対象物、評価行動が生じた場所、その場所の特徴を明らかにした。

その結果、(1) 利用者に評価された対象をみると、「巨木」、「草花」の 2 つの要素が多く散策コースにおいて評価された。(2) 利用者の評価行動が集中する場所の空間的特徴をみると、溪流を渡るために架けられた「橋」付近にあることが明らかになった。(3) 利用者の評価行動をみると、散策するにつれて全体的に減傾向となるが、場合によって散策の最後でも何かの契機で評価行動を生じることがある。(4) 最後に歩いたコースにおける利用者の評価行動の回数と評価行動全体の合計数の間に正の相関があることから、散策の最後に歩くコースは散策体験全体の質にも影響することが考えられる。(5) グループ中の男性人数と、評価行動全体の合計数、及び最後に歩いたコースでの評価行動回数の間に負の

相関があることから、グループ中の男性が多いほど評価行動が減少することが推定された。つまり、利用者の評価行動は、単にその空間の植生などの環境的要因や景観的要因に影響されるのみではなく、グループの構成にも影響されることが明らかになった。

第5章では、利用者の散策距離とその体験に着目した。散策の経路が異なる場合、散策路上にある特定の場所から受ける印象評価の傾向、及び評価の共通点と差異点を調査し、明らかにした。

その結果、(1)散策コース上の特定の空間に対し、利用者がそこまでの散策ルートが異なることにより受ける印象評価が変化することがあるという結果が得られた。(2)林内の空間である走り根エリアと冷沢峠、水要素を有する空間である平沢橋と呑曇淵とを分けて、利用者の評価の共通点、及び差異点を探った。以下の点が明らかになったことである。

林内の空間である走り根エリアと冷沢峠では、散策ルートが異なっても印象評価に違いがなかった項目で2ヶ所とも共通しているのは「開放感がある」、「景色が整然的」、「自然らしい」であった。また、印象評価に違いがあった項目の中で、2ヶ所とも共通した違いであるものは、「静けさがある」、「風通しが良い」、「植物・水・岩・巨木と接触できた」、「快適性がある」、「景色が特別的」、「楽しい」、「好ましい」であった。

一方、水要素を有する空間である平沢橋と呑曇淵では、散策ルートが異なっても印象評価に違いがなかった項目で2ヶ所とも共通したものはなかった。また、印象評価に違いがあった項目の中で、2ヶ所とも共通した違いであるものは、「静けさがある」、「景色が整然的」、「立ち止まってじっくり見たい」、「親しみやすい」であった。

これらの結果から、林内の散策空間において空間の開放感、整然性、自然性に対する評価は、散策ルートが異なっても共通していた。一方、水要素を有する2ヶ所の散策空間において共通した項目はなかった。水を有する空間の構成状況が異なることが多く、林内の空間と比べ、多様な空間構成をとっている。そのため、その場所にある自然対象物との接触の可否、そして、その場所に至るまで体験した景観により、利用者がその場所から受ける印象も変化することが明らかになった。

第6章では、以上の結果をまとめ、考察を行った。そして今後の課題についても述べた。

以上のように、本論文は従来の森林散策空間を場所毎に評価するという点的な研究視点に対し、実際に利用者の散策行動を考慮した連続的な視点から、利用者の行動の特徴、及びその散策行動による空間の印象評価の変化を明らかにした。今後、良好な体験ができる森林散策のための、散策コースを計画、及び改修する際の注意すべき点を指摘できた。